こころの光

佛果の巻

現行為種子因……一
実　体……三
修行身……九
二　障……一五
佛果義相……一七
成所作智……二二
十八円浄……二二
付　録……一一二二

現行爲種子因

種子の形而上

衆生心理の本質の根底は如來藏本覺眞如隨無明薫漸く麁に漸く强くして三道輪轉し眞妄和合して梨耶識を成ず。染淨二分不二而二なり。事法薫習して事の種子を成ず

今曰く、法身卽ち一大心靈の本質は觀念態にして、また其内容は理性態なり。此の理性を以て體とす。一大意志に實現せられたる萬物は卽ち事相なり。全宇宙は實體と現象との關係が一大理性の大海水に意志に實現せられたる客觀々念を物象とし、主觀々念を心象とし(理事の二法は世界の體用なり。)

之を人の心理には理性と感性。前者は形式にして後者は内容。

本覺眞如無明の薫に隨つて漸く麁漸く强くして三道輪轉し眞妄和合して梨耶識を成ず。染淨二分不二にして二、事法薫習して事の種子を成ず。此種子の中に所薫氣分あり是事種子其性は是理なり。此眞如の法と薫氣と合する、既に流轉の因なり。亦是反流歸還の因なり。染淨は是種なり。種子の性は是本覺の理なり。此に總して親因緣と爲る。

第八(理性)に此の六義あるのみに非ず、亦七轉識の現行の法の中にも亦皆眞如淨法潛伏す。此の現行の識も其自體淨にして本覺眞理通して後念の七轉識等の種子を薫成す。

六七識等亦是如來藏隨緣の義にして別の自性なし。是故に六七識亦本識の中の六義を具す。

一乘普賢圓因中には主伴を具足し無盡の緣起方に究竟す。又空有の義に由るが故に相即門あるなり。力無力の義あるに由るが故に相入門あるなり。待緣不待緣の義あるに由るが故に同體異體門あるなり。此らの門あるに由るが故に毛孔に刹海を容る事あるを得。

實體—所成識心

終教には賴耶に於て理事通融の二分義を得たり。論に曰く不生不滅と生滅と和合して非一非異、名阿リャ識。眞如薫に隨つて和合してアリャと成る。

楞伽に如來藏善不善の因と爲る。受苦樂與因俱、若生若滅。起信に自性淸淨心、因無明風、動成染心眞如凝然とは隨緣して諸法と作るとき自體を失はず。故に說いて常と爲す。是則ち無常に異らざるの常を不思議常と名づく。諸法と作らざる如情所謂の凝然にあらず。

勝鬘經中不染而染とは隨緣して諸法を作すことを明す。染而不染とは隨緣の時に自性を失はざることを明す。初めの義に由るが故に俗諦成ることをう。後の義に由るが故に眞諦又立つ。是の如く眞俗二義ありて二體なし。相融無礙。

三界所有唯是一心の解三義。十地品疏、云何一心而作三界、略有三義

（一）、二乘之人、謂有前境、不了唯心、縱聞一心、但謂眞諦之一、或謂二由心轉變、非皆是心。

（二）、異熟賴耶名爲一心、揀無外境、故說一心。

（三）、如來藏性淸淨一心、理無二體、故說一心。

境は唯心の變亦唯是心故唯一。一心とは八識諸心所相分見分不同なるも心外無別法

如株松雖根幹各別、枝葉衆多、但是松、卽一株松と名づく。

如來藏擧體隨緣、成諸事、而其自性、本不生滅、是故一心二門皆無礙、二門是一心。

寶性論、無始世來性作諸法依止、依性有諸道及證涅槃。

如來藏とは是法界藏出世間法身藏自性淸淨如來藏、故作諸法依止、如來藏は是依是持是住持、是建立。如來藏に依るが故に生死あり。如來藏に依る故に涅槃を證す。

圓敎、性海圓明、法界緣起、無礙自在、一卽一切、一切卽一、主伴圓融。

小乘　攝義從名門

始敎　攝理從事門

終敎　理事無礙門

頓敎　事(盡)理(顯)門

（　）　性海具德門

雙融、是卽ち本を動かさずして常に末、末を壞せずして而も恒に本なり。故に五義相融唯一心轉。

能　依　種　性

瑜伽種性　本性　住種姓　二習所成種姓

本性　菩薩六處殊勝有如是相從無始世展轉傳來法爾所得。

習性　先より善根を串習して得る處の性。

本性は本來所具の自體自性是始有に非ず、亦習性に非ず、本來如是性に安住故。

習性とは緣に値つて初起、習學(して)發生す。其の分位に隨つて成就し建立す。熏

習所得所有の法門。前者本有、後者始起。

本有種子は初始あることなく展轉傳來とは此の種子是有爲法、前滅後生、念々起沒

法爾　四種道理の中の一法、或は理、或は事、無別因緣、法如是故に軌則任持、無有改變、本然なり。事門法爾は諸の種子皆事法なるを以ての故に。

無始法性眞如實相法爾法然。

習性は本性の上に、善友に親近して、正法を聽聞し領解し、道心を發し、漸々修行し、二障を斷じ、恩寵を喚起し、無漏の新種を熏し、見道に入りて理性開展したるを無漏の新種と云ひ新舊合成して無漏の現を生ず。自後本始和合し念々無漏の現を生ず見道の初心は無漏現行本有の種性より生起す。已前は唯有漏現の故に、前に無漏の法は唯本有より生ずと許さるは、彼念に無漏また起すべからざる故に。串習善根とは見道前有漏の聞薰新舊合成の現行等の法を指す。前有漏習慣。見道新薰種子現行を生じ本性(住)の人法界等流の法を聞いて發心修行薰習所成と。

唯識に無漏種無始自成、不曾薰習、令其增長、名本種姓、性者體なり。姓者類なり謂く本性來此菩薩種子性類に住する差別あり。

正法を聞いて已去、無漏舊種增長せしむるを習種性と云ふ。

菩薩十二分敎の法界等流、平等而流、故云平等流、又法界性を若し能く悟る時は、便能生死を斷じ大涅槃に趣く、

法界性は善に順じ惡に違して具諸功德、亦名等流。

等流とは等は類似。流出從彼處出與彼相似故。

終敎本覺理を性種姓と云ふ。

不　增　不　滅

經曰舍利弗大邪見者、所謂衆生界增見衆生界滅

衆生不如實知一法界故、不如實見一法界故、起邪見心、謂衆生界增、衆生界滅、十方諸佛、說法敎化、各度無量衆生、皆入涅槃、於衆生界、亦不增不滅、何以故、衆生

定相不可得故。

問。種性は有爲なり。何ぞ眞如に約して性種性とするや。

答。眞如隨緣、與染和合、成本識時、卽彼眞中、有本覺無漏內熏衆生爲反流因得爲種性。

終教。本覺性智に就いて性種と爲。其の習種も亦眞如に從つて成する處、攝論に多聞薰習寂淸淨法界より流るる所。起信に眞如體相二大を以て內薰因となし、眞如用大を以て外薰の緣と爲し、無明染法と合するを以ての故に、是故三大內外に熏を說く、熏力を以ての故に、無明盡る時冥合不二、唯一眞如、

圓教。種性甚深にして因果無二、依及び正に通じ、三世間を盡して一切の理事解行等の諸の法門を該收す。本來滿足して已に成就し（　）故に大經に曰く、菩薩種性甚深廣大、與法界虛空等。

頓教。唯一眞如、離言絕相、名けて種性と爲す。性習の異を分たず。一切の法二相なきを以ての故に、諸法無行。經に云、一切衆生皆是一相、畢竟不生、離諸名字、一異不可得、故名種性、

一切衆生皆同一量、是名種性、一切衆生如虛空、終歸無障礙是爲種性。文殊利、一切衆生皆是一衆生、是名種性。

塵沙法數法界緣起に非ざるなし。故に緣起の法皆寂照を含む。一塵を觀ずる既に全く是法界なるを以て卽寂照具足。

別教一乘。二性を分つと雖、擧一全收實以一眞法界、本より內外なきを以て、二性を分ちて、本有修生と爲すべからず。暫く因門に就いて性習を論するは三乘教に順ふ

修　行　身

小乘。婆娑言、菩薩成佛有二身、一法身、二生身。

法身は能く戒等の五分なり。此の法身を修するに四時、一、三祇修有漏四波羅蜜。二、

百劫相好業。三、出家苦行禪定。四、菩提樹下成正覺。

生身は伽耶城淨飯王家受生報身、於摩伽佗國、登覺道、

今謂く、法身とは五分法身、今教に謂ゆる靈應卽ち如來の感應身、靈應長に我心殿にとは是なり。

キリストが所謂聖靈。已に恩寵獲得し已んぬれば人の精神を解脫靈化し、靈格として存在す。

三祇とは人の原始及び生物原始より進化の過程によりて人類となれり。又人類の中にしてすべての學術一切の所作は悉く手段にし心靈生活にて終局目的に導くが目的なり。靈格に到るまでは一切人類が萬行は手段なり、他の一切の學術等をすべて能く開展し發達したるも人類最終の眞理なる靈格に到らざればまだ終局なるにあらず。この靈格に到るまでの原始生物已來の向上發達の階段を三祇の萬行と云ふ。

相好の業とは如來の恩寵に感じて靈性を開發し次に內容解脫靈化する時、內靈福感すれば面に麗しきを顯はすに至る。敎主釋尊の諸根悅豫姿色淸淨等は是なり。內靈應に充給ければなり。之を得ん爲には出家苦行とは必ずしも形式に關はるにあらず。暫く精神修養の爲め肉の摧勵凝神を要す。

菩提樹下の成正覺の如く靈感交感靈應の功（　）によりて發得す。

相好の業中に釋尊宿世に一偈を以て、弗沙佛を敬するに卽ち九劫を超越して九十一劫に成佛すとは此に最深理あり。

靈應交感心機一轉の功鑰を得んとする、卽ち發得を期するに、一の應身卽ち彌陀空中住立の如き、キリストの再生生天の相の如くによりて、自已の感性の靈應を成せしむるは最も速なり。

弗沙如來に二弟子あり、後の一人は釋迦一人は慈氏なり。慈氏は理先に在りて成佛すべきに、先は彼は大心を發したりしも、彼は理性の方に重きを取りて、卽ち智藏菩薩として自利の行を專らにして修したれば、而も內容の方面に於て缺げたりければ、

自己のうるはしき妙ひを他に施すこと能はざりき。ために彼がその自己最深の內容を以つて他を同化するの動機なければ、彼は形式卽ち理性に於ては他に及ぼしたるにもせよ、全く他を內容同化すること能はざりし爲めに、所化の機類また熟せず。然るに釋迦は後に發心修行しぬるも、悲增の菩薩にして利他行滿ちぬれば、所化の境熟しぬれば、弗沙佛善功方便を以つて彼釋迦菩薩をして精進勇猛にして彌勒に越さしめんが爲に弗沙佛寶龕中に在しまして三昧に入り光明を放ち給ふ。時に釋迦この相好光明の如來を瞻仰し奉り足を翹て七日の問意を彼の靈相に注ぎて如來の妙色身相好圓滿なることを讃嘆し奉る。この精進に由つて九劫を超えて相好の業を成せり。

主體の內容を解脫靈化せん爲めには、如來の妙色身を感じ、この感應によりて、自己の內容を靈化する時は、自らその客體の悲智の光と自己と相感應して靈福を感ず。內に靈福を感ずるが故に、自ら相貌に現はるるを相好の業と名づく。

彌勒の理性と釋迦の感性、卽ち形式と內容動機、何れも一方に偏する時は完全なる宗教意識たる能はざるも、實的宗教としては、釋迦ぼさつを理想とせんか。

禪門の如きは理性より、淨教の如きは感性より。

小乘のぼさつ成佛するは個人的卽ち心理倫理にして、大乘佛教の菩薩は世界的宗教主體、客體は宇宙的なり。

終教に依らば菩薩實行を修するが故に實報身を成す。

萬行成滿自體の果を感ず。是を眞實自證の大果と名づく。卽ち自受用智法身體なり所證は是れ理卽ち法性身、能證は是れ智卽ち自受用身なり。出纏眞如、無有非智所證無分別智無有不證眞理、本覺智與本覺理一、合生始覺妙智、始覺智滿、與本覺合。

頓教成佛——一切時分皆不可說。但一念不生卽是佛。故卽一念者卽無念、時者卽無時。

圓教成佛——一切時分皆悉不定、何以故、爲諸劫相入故、相卽故、該通一切因陀羅等諸世界故、仍各隨處、或一念、或無量劫等、不道時法也。

圓教修行時分難測、念劫圓融、長短卽入、且如一類、須彌世界盡十方界、如空無邊、於中念劫卽入、修行又於塵沙中、念劫卽入。

修行所依身

分段身——物理的生理的の身、生類の身に形段あり、命に分限時（極）、必終あり。空間的に分あり、時間的に段あり、總じて生理的、卽ち異熟報身、命長短、若は身若は命定限あり。

變易身——二乘菩薩煩惱障を斷ずるもの分段の麁苦を離ると雖も猶梨耶變易の行苦あり。四相に遷轉改易するの故に變易、又因移果易故に。

今曰く、變易身とは生理的物理的組織に於ては二種異ることなし。但し人の精神に於て天然的精神生活を分段と名づけ、信仰修養の結果聖靈交感恩寵獲得の後、人の心機一轉し情操一變人格の更生、菩薩卽ち靈格となるに至り、有餘依身は變らねど心靈は轉ぜり、之を變易身と云ふ。

心靈は既に如來の永恒の中に致一し內容は相好光明に（充）さるる。人格の中心に於て一變せり。分段生死は主我主義自己中心なり。靈格は無限の如來卽ち眞我を以つて中心とす。

二　障

煩惱障——內容感性惑、卽迷事惑、後得智所斷、

煩惱とは偏執の實我を首とし百二十八根本煩惱及び彼等流の煩惱能く有情の身心を擾惱し能く涅槃を障る。

貪瞋等の惑遍ねく現行を起し、身心を惱亂し、不安穩ならしむ。

所知障——理性、偏計の實法、卽ち理を執する薩伽耶見を上首とし、見（疑）無明愛悲慢等所知の境と無顚倒の性とを覆ふ。能く菩提を障。

根本智——無爲の境を緣じ眞如を照すが故に。
後得智——事法を照すが故に理事二法を照す。

我執二

俱生我執——無始來、虛妄薰習、內因力故、恒與身俱、不待邪敎及邪分別、任運而轉故。此二種

一、常相續——第七識緣二八識一爲二實我一——意志

二、有間斷——第六識緣二五取蘊相一爲二實我一——感情

此二我執細故難斷、勝たる生空觀を修め方に除く。

分別我執——由現在外緣力故、非與身俱、要待邪敎及邪分別、然後方起、故名分別唯在六識。此二種。

一、緣邪敎所說蘊、起二自心相一分別執二實我一

二、邪敎所說我相を緣じて自心の相を起、緣して實我とす。

此二執麁故に易斷、見道の時一切法生空眞如を觀じて能除滅す。邪敎邪師邪思惟の三緣より起す。

分別起惑見道所斷なり。

分別俱生に各有三種、種子、現行、餘殘習氣、現行種子を俱名正使。

末那煩惱、行相微細任運、唯非想處(觀)故一時頓斷

佛果義相

小乘佛果は、唯是無常、本性の功德を說かざるを以ての故に。小乘には性得佛性なし。但修得のみ有るが故に。

始敎は、法身は是れ常なり。自性なるを以ての故に。亦無常なり、離不離なるを以ての故に。修生功德は是れ無常なり。因より生ずるを以ての故に、是有爲無漏なるが故に亦常。

別敎には、修生功德は是れ無常なり。修生なるを以ての故に。亦卽ち是常。一得已後眞如に同ずる故に。何を以ての故に、本從眞流故、無明已盡、還歸眞體故。

梁攝論に此法身より流せざることなし、還此法身を證せざることなし。

用大は體より起りて還て體大に歸する故に。修生功德既に法身に冥するが故に自受用智本と冥して常住なり。

法身是常、以隨緣時不變自住故、亦是無常、以隨染赴機故、何以故、以諸功德既並同眞、是故起用唯是眞作なり。

法身隨緣義に由るが故に功德差別成ずることをう、不變の義に由るが故に功德とし眞に卽せずと言ふことなし。與體隨緣して全相不變なり。二義鎔融して融無障礙故、是故佛果卽常卽無常。

頓敎佛身

無相離念唯一實性身平等、

涅槃經曰、吾今此身卽是常身法身

一切諸佛身、唯是一法身、一心一智慧、力無畏亦然。

圓敎佛身

(一)用に約するに、佛果既に三世間等の一切法に通ず、常等四句あり。

一、常恒順法界無間斷故。二、無常隨世間現故。三、俱二義俱現前故。四、非俱隨取一不得。故緣起無性故。

(二)約德。佛果既具四義、謂一修生、二本有力修生、四生本有圓融無礙、備無邊德

(三)約體。此經中不可說を以て顯さんがための故に。是常。阿含と相應するが故に是無常。二義無礙故、俱有隨緣起際故、俱非なり。

一乘佛相好。十蓮華藏世界海微塵數相彼一々相皆遍法界業用亦然、十と說くは無盡を盡さんが爲に。

法華論、釋曰五百塵點已前成道是釋迦佛實修實證本地久成佛果彼時實智證法身理所

證眞理卽是法身能證妙智是自受用身所變五根自受用身必有其化用卽是他受用土

得常涅槃證とは是自證身其能證智等是是自受用身必有二化用一卽是他受用應十地菩薩現十重身故眞實淨土明自受用土言第一義諦攝　自受用根本理智證眞如理其後得智變作自用五根相好及自用土旣是自證內證所行其後得智亦是自利後智。

自受用は法身眞如理、天人常充滿、他受用

十　佛　自　境

十佛を立て顯二無盡一、十身二種

一、融三世間十身——一衆生身、二國土身、三業報身、四聲聞身、五緣覺身、六菩薩身、七如來身、八智身、九法身、十虛空身、

佛の上の十身——一菩提身、二願身、三化身、四力持身、五相好莊嚴身、六威勢身七意生身、八福德身、九法身、十智身、

佛　智　經　佛　果　德

佛果德總有五法、所謂淸淨法界と四智心品、淨法界とは四涅槃、本來自性淸淨涅槃有餘涅槃、無餘涅槃、無住處涅槃此四を淸淨法界

客　體　攝　化

遍法界の華藏十々無盡を顯はす無盡華藏一々皆遍法界十佛境界

成　所　作　智

隨有舍林地山等事皆是法門なり。或是行或是信或敎(義)等而も其事を壞せず、仍一々塵中皆法界一切差別事を具足し因陀羅微細成就隨一事起皆悉如是。

謂く華香雲樹は卽ち法界の法門刹土衆生は本十身の體なり。

華藏世界所有の塵一々塵中見法界。

十方世界塵々有土々亦塵々各有佛土如是重々無盡皆是華藏世界所攝盧遮那遍中卽轉華嚴法輪

華藏界は因陀羅に(　)ずるが故に諸塵に周側し此稱法界の法門を說く

十八圓淨　佛地論文

薄伽梵住最勝光耀七寶莊嚴　顯色圓滿

放大光明普照一切　放光圓滿

無邊世界　分量圓滿

無量方所妙飾間列周圓無際其量難測　方所圓滿

超過三界所行之處出世間善根所起　因　圓滿

最極自在淨識爲相　果　圓滿

如來所都　主　圓滿

諸大菩薩衆所雲集　輔翼圓滿

無量天龍人非人等常所翼從　眷屬圓滿

廣大法味喜樂所所持　住持圓滿

作諸衆生一切義利　事業圓滿

滅諸煩惱災橫纏垢　攝益圓滿

遠離諸塵　無畏圓滿

過諸莊嚴如來莊嚴所依　住處圓滿
大念慧行以爲遊路　路　圓滿
大止妙觀以爲所乘　乘　圓滿
大空無相無願解脫爲所入門　門　圓滿
無量功德衆所莊嚴大華王衆所建立大宮殿中、　依持圓滿
如是十八圓滿所嚴宮殿名佛淨土
十八圓滿三界外者卽於穢土是成淨土非謂離此別有界外卽染顯淨故

佛說敎處三種

一、唯界內化身說處　二、界外諸妙淨土　三、染淨圓融

成所作

起信論に云、不思議業相とは智淨に依るを以て能く一切勝妙の境界を作す、所謂無量功德の相常無間斷隨衆生根自然相應し種々に示現して利益を得せしむるが故に。

附錄

一八

— 1 —

董しみ惟みれば梅花發くを待つ冬の末つかたより御地に留まり梅が香をわづか名殘にとゞむるけふに至るまで幾回の日を重ねて何かと御心盡しの御もてなしに預り御厚意の程感謝に耐へず候。

願くば此因緣を以て御全家御心を一にして益〻佛の大道に進み人生一大事の因緣たる佛知見を開示し佛の正道に悟入せられむこと希望に勝えず候。寔に有爲遷流の世は光陰馳行くこと須臾もとゞまらず若し怙み難き明日を期して道業を修さむと爲んとすることならば一生空しく過してつひに得處なく闇に入りて何の生にか光明に接することを得む。

古人云く

此身今生に向て度せずんば假令彌勒の下生を待つとも竟に解脫の時なしと。

寔に人生一大事の因緣は自已の靈性を開發し大ミオヤに親近し聖旨に隨順して今身より永遠の生命を得るにあり。

若靈性開發する時は此處卽ち是涅槃極樂界なり何ぞ必しも此身の命終を待つて初めて淨土に生るゝことを要せむ。

大ミオヤ慈悲の眦を注ぎて子等の信念を催し給ふ願くば冥想觀念して大ミオヤの聖意に合明せむことを希ふ。

御好意に報うるに道業を勸め候こと斯の如くに御座候。

一九

肅しみて白し候

先つ頃は八重九重に咲匂ひぬる櫻の花も散りはてゝ今年の春の名殘りを告る今日此頃物寥しく感ぜられ、また新綠のみどりを添へて樹々の梢にも

大ミオヤの御圖らひの程を感じられ碧深き木の葉の色も嬉しげに有るよろづのなかに

大ミオヤの恩寵のこもらぬくまもなく是を見彼を聞くにもあり難くてぞありける。

さて此程は、深く御配慮にあづかり、ありがたくぞんじ候。思ふに已に數年前よりの病氣を自ら知らずして今日に至りしものなれば、已後よく注意してあまり無理なる事をせざれば急激に進むこともないものならんと存候。毎日々々それでも如來樣が御使ひ下さるには格別に差支なきことならんと存候。

されども御親切なる御注意を被むり有難く存候。爾後尙一層注意いたして養生する事に心懸け候。かたじけなく御禮申上候。

實は其病氣よりはもつと〳〵容易ならぬ病氣の爲に常に頭を惱ましつゝいつ此病氣が何分なりとも快き方に向ふものならんと案じて止まぬ次第にて候。

昔敎祖釋尊の御在世に維摩居士が重き枕に臥ける時に釋尊が御心を惱ませ給ひ誰か

居士の病氣を訪問せよと仰せられ給ひしかども、誰も皆維摩居士を恐れて私が訪問しませうと云ふものが一人もありませんでした。最後に文珠菩薩に仰せられて居士の病氣訪問と云ふことになりました。すると文珠菩薩が居士に、たづねに成りました居士よ全體貴士が病氣の性質はいか成る病氣で御ざると問ひますと、居士は、實はわたくしの病氣は一切衆生の病氣が私の病氣なので、衆生の心の病が治らぬ間は私の病氣の治りようはありませぬ。殊に〳〵私の心にかゝる病氣と云ふのは釋尊の御弟子の名前こそつけざれ實には精神的に本とうの御弟子となつて居らぬのである。いかにも其等弟子等の病氣を治してやらねばならぬと云ふ病氣の爲に私の病氣はいよ〳〵重くなつたのであります。

今愚衲の病氣もこゝにあります。現に日本人は種々の事に醉うてしまつて眞實に眞面目に人生を大ミオヤの聖意にかなふ樣な生活をなさねばならぬと云ふ眞面目な人物は實に稀にして雨夜の星を見る樣に感じられます。願くば此日本の國民が宇宙の大いなるミオヤを眞實にミオヤと信じてミオヤの子であるとの自覺を以てミオヤの聖意にかなふ人生となるやうにねがはしく此衆生の病氣がもつとも愚衲の病氣にて寢てもさめても惱んで居る次第であります。たとへ全治には到らざるとも何分かは前途に光明を見まほしくて候。

尙此心の病氣につきても一心に大ミオヤに一切衆生の病氣平癒を祈り申と共に此からだの病氣につきても一層御注意いたすべく候。

尙先日敏子樣よりの書簡に對して御返事もいたさずつひにのびのびになりまことにすみ申さず、願はくば大ミオヤの聖き御名を以てます〳〵聖意に仕へ奉らんことを大ミオヤの聖き名を以て祈り奉候。

二〇

時蕭殺たる風に野山の草木も凋れて何となく無常之觀は天地に充ち滿てる頃ほひ此

頃光德寺上人よりの御便りによれば御子息喜代司君には御丹誠の甲斐なく遂に永眠なされしとの事。先年はじめて知り初めてより求道の御志深く末頼母敷存候ひしに其後は東西隔りたりと雖云何在られるかと心にかゝりつゝありしところ此度つひに其訃音に接する事になりしは今更の感にうたれ候。あゝ生者必滅は娑婆の習老少不定は人界の掟とは思ひながらも實に驚歎此事に候。就ては如かし泉の式部がその息女小式部の内侍に先きだゝれし頃ほゝ悲しみのあまりに『もろともに苦の下には朽ちずしてひとりうき目を見るぞ悲しき』、との歎きをおもひてあなたの御悲しみに何とも同情に耐へず候。然るに和泉式部はそが動機となりて性空上人の教化をうけ後には念佛三昧の門に入り深くみだの慈悲の薫習し口に稱ふる所は彌陀の名號、意に念ずる處は如來の御慈悲、いつとなく染まる心は秋の楢の紅にいよ〳〵深きを增しぬる後には斯は思ひしにや。

曾て佛教を學びしは歌をよむ材料を得むが爲位にて習ひし佛教なれば一大事我息女に先きだゝれし時にのぞんで見れば其佛教は我が深き慟哭の情をたすくるの力なく娘の眼前の無常こそ眞實の佛法を求むるの媒となりつひに活ける彌陀の慈悲に觸れて初めて生れ更りたる式部となつた其頃に

夢の世に仇にはかなき身をしれと教へて歸る子は佛なり

と眞の信仰が出來て立かへりて顧れば我子こそは眞の善知識若しも小式部が導びいてくれねば只だ佛教を歌の材料位にとゞめて全く自己を現在より永遠の生命に救ふべき眞理なるを知らずしてしまつたであろうと思へば娘は身を犧牲にして我を眞實の佛法に導びきしものとすれば教へて歸る子は佛なりと感ぜざるを得ぬ次第ならんと思ひ候。五井夫人よ先立ちし喜代司君は眞實にあなたを導びきなさる善知識であります。

あなたの悲しさの深ければ深きほど大ミオヤの如來さまの慈悲の御手に御すがりなさりませ。

あなたの慈悲の手より洩れたるをかなしみ大ミオヤの如來の御慈悲の御手を離れぬ

やうに聖名を稱へて意には一心如來の御慈悲にたよるやうに御すゝめ申上げます。

二一

此頃御病容いかゞ在らせられ候哉よしや御身御床のなかにもせよこゝろは彼のみだの淨土におもひをすましめ給へよ。しかるに彼のくにのよそほひ其寶の樹のさま一切のもろ〳〵の寶を以て自然に合成し無量の光り照す微風ゆるく動きて諸の枝葉を吹くに無量の妙なる音聲をいだす其音流布して諸佛の國に偏す音を聞くものは深きさとりを得るとかや。八功德池の水に心をすましむれば我心も自づと湛然としてすみたゝへ清くいさぎよく甘露を味ふごとくに感じらるべし。黄金の池に水昌の砂はかゞやけり意を水にすましぬれば調和冷煖にして自然に意にしたがひて神を開き體を悅ばしめ心垢を蕩除できよく明らけく潔くして形なきがごとしとかや。我を忘れ身をわすれ神を淨土にすましぬればこゝもまた淨土にてぞありける。

二二

清き光に照され慈愛のあたゝかなる家庭の山中家の子女のきみたちまでにまをす。

宗教は先づ安心を定むることが其礎であります。安心とは人生の主義と目的との確定することであります。苟も人生に此安心未だ定まらざる人は盲目的生活と申します最高等なる宗教心にて定むべき安心に三の條件あります。一、所求、二、所歸、三、去行との三つであります。初め所求とは人生の目的として要求する所であります。要求なしに信仰の立つわけはない。然らは何が人生の目的としての要求する所でありませうとなれば先づ人は若し出來得るなれば永遠の生命「永恒に生き通しに成りたいこと」常住の平和を得たきことゝ圓滿なる人格に成り度きこと。云ひ換ればいつまでも活き通ふしにしていつもたのしき平和にて安心のできる身となりてまた一切の人にも愛敬せらるゝ圓滿なる人に成り度いと云ふのが所求と申します。斯やうな望みは理想

の高き人ならば何人にても起る要求でありますが然しながら斯やうな目的がいかにして達せられませう。此要求を満たすのは形の上ばかりでなく精神的に得らるゝのであります。此要求に満足を與へて下さるのが所歸の尊と申します。

二、所歸とは歸命信頼と申して宇宙に唯獨りの尊き御方が在して此の尊き御方にすべてを御任せ申して精神的に人生の終局の目的を満足させていたゞくのであります。

然らば其の宇宙に唯一の大**ミオヤ**と仰ぐべき御方はいかなる御方で在すでせう。それは我等凡夫には分りませぬ。故に釋迦如來が此世に出で給ひて其眞理を教へ給うたのであります。宇宙間に一り絶待的に尊き御方を阿彌陀如來と號します。アミダとは空間に十方世界を照して一切の衆生の心靈を靈化し給ひて人格を完全にして下さる御方にてまた無量壽と申して永恒に生き通うしの義は御自らばかりでなく一切の心靈を永恒に活き通しにして下さる御方と云ふ義であります。此如來は宇宙間に獨り尊きと共にまた一切衆生の大**ミオヤ**であります。

此如來が我等に與へて下さる御惠と御力は恰も太陽の光（エネルギ）を以て此形體を活して下さる如くに如來は私共に靈的無限の光を以て心靈を活かして永遠の生命と圓滿なる人格とに爲して下さる御方であります。

我等が精神の奥底に伏せる心靈が大なる無量光如來の光明にて開發靈化せられて圓滿なる人格と爲り得らるゝと云ふならば然らばいかゞせば其要求を如來は與へて下さるのでありませう。是に於て第三去行（方法）を要するのであります。

第三、去行（方法）私共が永恒の生命と圓滿なる人格とが成就せんには宇宙最尊の無量光如來を歸命信頼すべきのであります。そして如來の光明と衆生の信念との間に行はるゝ方法は念佛三昧であります。ナムとは私共がすべてを如來に任せて頼む意味にてアミダ佛とは絶待無限の太陽なるアミダ如來のこと。我ら佛を念ずれば如來の聖意に入り如來の大なる聖意は我らが心に入り大**ミオヤ**の大靈心と我らの心靈の生命の通ふ所の精神を言に現はして、ナムアミダ佛と云ふのであります。

精神的に大なる如來の慈悲と我らが念佛心と常に感應する所の方法を念佛と申します。我らは如來（大**ミオヤ**）の光明によりて靈に活きて益々向上する所の人生であります。我らが人生は靈に活きます〳〵完全に圓滿なる人としていたゞくのであります。

如來の絶對無限の一大靈電が一切衆生の發燈器の裝置する所に靈光は現はれます。此靈力は衆生を永遠に活す力にて私共は大光明の中にます〳〵向上的に生活してゆく所に價値ある生命光明の生活に入るのであります。

上來の要求と歸命の本尊「活ける本尊」と念佛とが確かに心に定つて益々向上する心の定つたのが安心決定したと云ふのであります。

願くは山中家の御家庭の中に大**ミオヤ**の光明が照り渡りて麗き心の花はかぐはしく咲くやうに祈ります。

二三

君よ。現在君が執てをる職務をば眞に神聖なる物として大**ミオヤ**が選みてさづけ給ひし業として悦んでつとめて居る哉。將た是も人間の活役何か爲ねばならぬ故に此の職務を執つてをるに過ぎぬと思ひなされ給ふ乎。私が此迄多くの教育家に就て其職務に對する心の置き方を窺ふに宗教心のある方は前に屬し、信仰心の無き方は多くは後の方に屬してをる樣に見えます。君の現に執つて居ますつとめは他の金錢抔の物質のみを取り扱ふ業とは殊にして人間の最も貴重なる精神上のことに人格の基礎を造るべき教育の業務は最も神聖なる職務にして卽ち天の**ミオヤ**より君に選みて授け給はりしことなれば大**ミオヤ**に感謝の意を以て悦び勇みて業に從事する時は、非常に大なる力を以て満足の念を以てつとむることができます。

君よ夫にしてもそは全く宗教心が充分に成じたる上のことにて候。然らばいかに宗教心を成就せんとなれば宇宙間に獨り尊き大**ミオヤ**の實在を信じて其に歸命信順して**ミオヤ**の恩寵によりて自己の改造を祈ることにて候。元來人間の天然の我は煩惱の皮

穀に覆はれて如來の靈光を感受することができぬ。されば至心に念佛して無始の業障消滅し靈的光明を被むりて心靈が復活せば如來との間に於て、如來よ、アナタは全く我御親にて我は共くアナタの御子であるとの自覺と共に、暖かなる慈悲に融化せられて眞に靈的に活きて來ます。

君よ、君が理想の人格標準となる人を紹介いたしますから君はそれをきよき理想の勝れたる同胞として其方を模範として人格を形成し修養し給へ。

君は佛教の中に種々の方面に多く現はれてをる觀世音菩薩の何なる聖者なる哉を知り給ふ乎。彼の菩薩は種々の方面から見られてをるけれども、私どもの彌陀を中心本尊と爲る如來光明主義より觀世音菩薩を見る時はかやうである。

彼の菩薩は宇宙唯一の尊き彌陀尊の法王子たると共にまた彌陀を尊信する諸の信仰家の代表的聖徒である。されば今君が如來の光明に依りて靈に復活し、常に彌陀の聖意を奉戴して、彌陀に献げたる心を以て自己の職務を神聖とし、是ミオヤの使命として、勇み進みて潔よく仕ふる心にて世に立つ時は、卽ち是觀世音の分身なると俱にいける觀世音である。

觀經に凭やうに說いてある。若し誠に〳〵彌陀を信念し彌陀の聖意の水に淸められ心の花開きし者は卽ち人間中の白蓮花である。蓮花は泥中より出でながら最も淸淨皎潔にして麗はしき色と芳ばしき香とを呈してをる如くに人は煩惱の泥中より聖き信仰心が咲き出づるは恰も泥中より出たる白蓮に比すべく、されば觀世音菩薩も勢至菩薩も其が爲めに勝友と爲りて其人を愛護し給ふ。いかにとなれば其人は既に彌陀の子と生れたる者なればなりと。

視給へ、觀世音菩薩の尊像の寶冠に一の化佛を奉戴していますは卽はち是れ大ミオヤなる彌陀尊なので而して相好圓滿百福莊嚴を以て人格を飾り胸に金銀瑠璃寶石等を以て瓔珞として嚴飾するは卽ち智慧仁慈正義安忍剛毅謙遜貞操等の諸の道德にして是れ全く人格を莊嚴するの具である。然して有ゆる道德の根本は卽ち彌陀の心光を信奉

し慈悲を愛樂憶念し聖意の現はれを仰ぐ處のいときよき心である。

君、活ける觀世音よ。宇宙の心靈界に輝ける彌陀の光明によりて靈に復活し給へ。活ける觀音として世に立ち給へ。人生宇宙の主なる無量光の光明を以て自己の心光とし**ミオヤ**の使命を果さんが爲めに献身的に最善の努力をする者是れいける觀世音なりまた觀音の分身なり。

視給へ太陽はすべての生物を活かす處のエネルギーを放ちて止まぬ。

彌陀は靈光を惜ぬく衆生の心靈に滌ぎて靈的の活氣を與へ給ふて居る。

人は太陽の光を離れて活くることは不可能である如く、人の心靈は彌陀の光明を離れて活くることはできぬ。

彌陀の光明は人の心靈を永遠に活かす靈力である其光明を被むりて本とうに有り難き信仰心が開らくれば卽ち觀世音の白蓮のそれと同じく麗はしき潔よき活き〳〵した心と爲る。

其信心の花開くが故に天の獨り尊き大**ミオヤ**を信ずることができる。こなたから**ミオヤ**を信樂するが故に**ミオヤ**はこなたを深く愛護し給ふ。

彼の靑蓮の如き淸らかなる慈悲の眦は我等が上に注ぎ給ひ。いとあたゝかなる慈悲に抱擁せらるゝ我等は眞に靈福を感じてをる。

彼の海よりも廣きみむねが通うてをるから永しへに法悅と妙樂と平和とにくらさるゝのみならず大なる無限の泉源より流れ來る靈力を加被せらるゝが故に日々の仕事の上に勇みと力とを得てつとめらるゝ。

彌陀の光明に觸れて本とうに活き〳〵して朝のかゞやく如く夕日のまばゆき如く、我心のうちに赫々として永しへに活躍し得らるゝは是不可思議の業によりてなり。

二四

眞實大乘敎の意に依れば、現在も未來も此界も淨土も悉く共に大みおやなるあみだ

如來の大心海中にてあり。

されば經には如來是法界身、又「一切衆生心想中」と又善導大師は彌陀身心徧法界、映現衆生心想中」と

讃しなされたるは、宇宙法界一切處として如來の御身と心との徧滿せざる處はないので、全く如來の大悲心光中に在りながら衆生自から知らずして自分の業報に依りて只娑婆人間界と計り見て居るのである。

恰も立派な人の住居の中に在りて蠅は只蠅だけに見て居る樣な物である。若し心眼開きて見れば此處もまた如來淸淨莊嚴の淨土である。されば觀經にはあみだ佛去此不遠と說給ひし。

されば寐ても寐ても只專らみだの名號を稱なへ常に大みおやの大光明中なることを忘れず如來の應身現に此處に在ますことを念じ一切の所作は皆如來より命ぜられたる事業なることを思ひ、同じく如來の大心界中なれど現在私共が生活して居る方は粗末な方にて働らく處である。たとへば農家にて働らく時には粗末な服を身につけてまつ黑に成て働らき、而して休み遊ぶ時には衣服を着換て奇麗な處にて遊ぶように、同じ如來の中に在りて現在は粗末な身と服とに一生懸命働き而して遊ぶ時は淨土の方にゆきて身も服もきよらかに成て樂を爲るのである。然れども農家にても働らく時に樂をして居つたならば休む時に奇麗に成て樂をすることが出來ぬ。實に此身と此世界は一生懸命に働らくべき爲に人界に出て來たのである。

されば大經に汝等是しやばに於て廣く德の本を植ゑ恩を布き乃至德を爲し善を立て正心正意齊戒淸淨なること一日一夜すれば極樂に在りて善を爲すこと百載するよりは勝れたりと。かように此世界は一心につとむる處であるから、何を爲すのも皆正心正意の佛道修行でないものはない。又他人から讒謗されても還て私をきたへて下さる如來さまの賜物と信じて勇みて進むべきである。それを知らぬと只惡く取て自分の心を惱ましみをいため、他人を恨み自心をかこちなど、して、自分の心までもねぢくれて來

るそれを還て如來さまからは黑鐵をきたへて名劍と爲て下さるのであると想へば、

打たばうてたゝかばたたけくろがねも
つるぎとぞなる忍びとほせば

人間一日の命も皆如來より賜物と信ずる時はいか成る場合とても、自からくぢけたりそれから自殺するなどゝいふことはできぬ。いか成事をも悅びすゝみて淨土の業とせねばならぬ。

二五

佛敎に聖淨二門と分るれど所詮は自己の心が佛と成る外は無い。大原問答に往生と成佛とは同じ事であると。往生にも精神の往生と身體の往生とある。

成佛に自己の力で佛に成るのは丁度木と木と摩擦して自分と火を出すが如く自力で悟の光を發すのである。他力と云は阿彌陀如來光明の火を以て衆生の心の炭につく時は、彌陀の光が卽ち自己の光明と成て光明の生活と成る。光明の生活が卽ち聖道門に云ふ處の成佛得道と同じことである。

精神には此世と後世と一體である故に、今現に此精神に如來の光明を得る外に佛法はない。如來の光明生活に入れば現世を通じて永遠の生命となるのである。理論よりは事實である。身體も生命も財產も一切は自己の精神生命ありての事である。

此精神生命に如來の光明が獲得すれば信念の瓦斯に火が點じたのである。念々光明生活と爲る。釋尊善導大師元祖大師も皆光明生活に入て現世を通じて永遠の光明に入た人である。願くは光明生活に入て今日の事務につとめられんことを。

次に御內室は一心一向に求法に執心のつよいつよい力を持て居る。念佛者は一心不亂執持名號なので、執と云執念がみだに對して深いのがよい强いのがよろしい。執心が一心一向にかたまつて强いけれども、光明得られないので煩悶の中にとらはれて居る。あの位執心深いのであるから、十分に光明獲得んならば、天理敎の山中みき子

のやうな、つよいつよい信仰家と成るのである。

一心の執がつよいだけに光明獲られぬうちは隨分煩悶もつよい。

承はれば昨年或人の中傷にかゝりて非常に煩悶したとの事、矢張それは執心强いから物を氣に懸ける事も强いのであると思ふ。故に若し之に充分なる信仰の光明を獲る時は歡喜信樂の度も强いのであると思ふ。故に若し、

譬ば井戸より瓦斯が沸出してこもる時は若し火を點ずればいかに瓦斯が多量にふん出しても益明度がつよくてよいが、之に火を點ぜざれば還つて害をなす。佛に對する執念の度が强い求道の念つよいが之に光明獲得する時はいよ〳〵明らかな生活と成る若し光明得ざる間は多量の念の瓦斯が胸に充滿して煩悶となる樣に存じられ候。若し之を保護し信念の光明得せしめば實に立派な信仰出來るものと存じ候。願くは共に々如來大慈の光明によりて復活せられんことを祈候。

昭和七年四月十三日　印刷
昭和七年四月十五日　發行
貼代郵稅共　年二圓
編輯兼發行人　小石川區關口町六十五番地　山崎辨成
印刷人　小石川區關口町六十五番地　小林七太郎
印刷所　東京市小石川區水道端二丁目四十四番地　靜文社印刷所　電話牛込五四一九番
ミオヤのひかり社
振替口座東京六六八五一番